

他界と方位(その二) : 陰陽五行思想の展開

前城, 直子 / MAESHIRO, Naoko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

255

(終了ページ / End Page)

303

(発行年 / Year)

1989-02-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002574>

他界と方位（その二）

——陰陽五行思想の展開——

前 城 直 子

一

朝露のようにはなく、限りあるひと世と知った時、人は無限の命を夢想する。身分の上下を問わず、男女の別もなく、はたまた洋の東西をも超えて、人は永遠の命、不老不死の見果てぬ夢を抱かずにはいられぬものであるらしい。

これが、絶大な富と力と名誉を掌中に収めた者であつてみれば、その希求もまた一入であつた。

この国の上つ世に、記紀万葉においては「大泊瀬幼武天皇」おみはつせわかたけのすめらみこととして、晋書・宋書においては「倭王武」として登場し、実在が想定されている雄略天皇があつた。記紀の伝えるところによれば、彼は荒々しい闘争心と恐るべき残忍性を兼ね備えていた。両の手をどす黒い血にとつぷり染めて、自ら

の前に立ちほだかるライバルをバツバツと切り倒し、強引に、次々と野望を達成させていく。しかも自らの犯した罪に、一向におののく風も見せなかった男である。

むろん、記紀に見る雄略の一連の行為が、すべて彼の実像であったかとか、あるいは彼の生きた時代背景・政治的状况などを、我々は丁寧に向う作業を忘れてはいけないのだが、今はこれに手をつけることが目的ではない。

この類まれな残虐性を持つ雄略帝の最後は、英雄の末路をもの悲しく盛り上げてくれるものがある。古事記はその最後を伝えないが、日本書紀は簡潔かつ雄弁に、英雄の最後を抽出する。

すなわち、在位廿三年の七月一日、幾多の敵にもついに倒されなかった雄略であったが、病は彼を完全にしたたきのめした。八月七日にはついに重病に陥り、百官が列をなして最後の別れを告げた。病室に残された彼は、こぶしを強く握りしめ、振り上げて、烈しく泣いて死んでいった。

富と力と名譽のことごとくを手に入れ、人一倍、激しく生へ執着したであろう雄略であったが、せまりくる死に対しては、何ら打つべき手を持たず、もがきながら死んでいく様は少しく感動的ですからある。

人はすぐ「平氏にあらずんば人にあらず」と豪語した平清盛の最後と、この雄略の姿をオーバーラップさせるに違いない。「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」

と、人生を高らかに誇らかに歌い上げ、満足しきって生きた関白藤原道長も、今わの際には、阿弥陀の御手から伸びた五色の糸をたぐり寄せて往生したという。

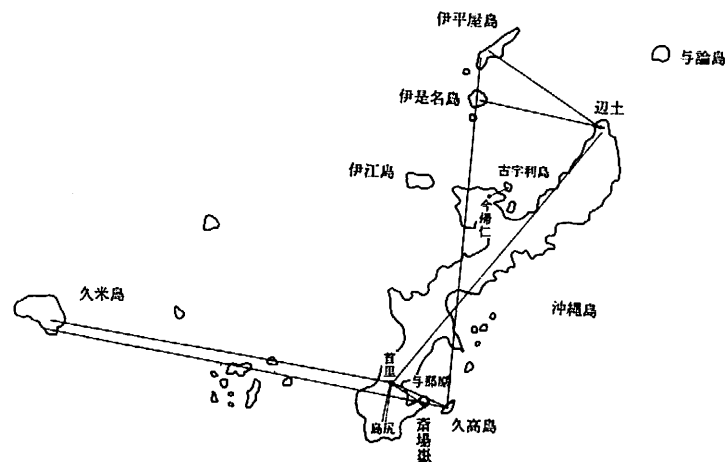
雄略の烈しい鳴咽ともがきは、死と向き合った人間の典型の姿であり、やがてこれが古代信仰・宗教的他界観の形成へ流れ込むであらうことは想像に難くない。

死ななければいけない命であつてみれば、死なない命を渴望するのは、人間の自然の感情というものである。

再誕の命・永遠の命……人間の最終的かつ最大の見果てぬ夢は、いずれの国においても例外なく、古代社会において強烈に希求され、華々しく呪の実修が試みられ、思考的にも深く哲理化がはかられていく。

これらが仏教の伝来により、宗教的完成を遂げていくのが、阿弥陀の御手に導かれ、極楽浄土に永遠に生きる道長の話を生み出すのであり、雄略との思考的経路には、さほどの径庭はなく、むしろ両者はひと続きの線上にある。

さて、わが古琉球はいかにと目を転ずれば、ヤマトの南の果ての小さなこの王国の王も人々も、強大国に勝るとも劣らない情熱を以て、命のゆくえを凝視した。長い歴史の中から多くのものを学び取ってきた現代人が、その解明に束になってかかつてはじき飛ばされる程に、あらゆる信仰的世界を取り込んで、彼らは複層の他界をつくり上げていった。彼らの渴望が強く、深く、真剣かつ切実で



第1図 古琉球における地図と方位の相関

で、再度示すと次の通りである。(一)内は古琉球を示す)

一 水平(東西)軸の関係

伊勢——大和、常陸(鹿島神宮)——出雲
(出雲大社)、東方わたつみの宮・常世——
此界(葦原中国)、大和——日向
(与那原——首里——久米島、久高——斎場
嶽——久米島、古宇利島——今帰仁、伊平
屋・伊是名島——辺土)

二 垂直軸の関係

天上他界——虚空他界——山上(中)他界
——地底他界、高天原——大和香具山——黄
泉国
(天上他界——山上(中)他界(御嶽)——
地底他界、オボツカグラ——首里城(聞得大
君御殿))

あってみれば、接近を試みる現代人の底の浅さをせせら笑うかのように、幾重にもヴェールを垂れかけて、容易にはその実相をのぞかせてはくれない。しかし近づくかねばならない。是非にも彼らの深奥を知らねばならない。

前稿にひき続き、従来とは別の視座から、彼らの思考回路への接近を試み、古琉球、古代日本にとって最大のテーマである他界の信仰軸の解明をめざしてみたい。

二

さて、前稿において筆者は、日琉の他界を方位という観点から捉え直してみた。今、これを地図におきかえて、位置・方位関係を確認してみると第1図のようになろう。

これを古代日本との比較の上で図示すると第2図のようになろう。

むろん、この配当は共にかたがた古代に属する範疇対比であるから、今日の純粹地理学的方位に必ずしも正しく合致しないこともある。右の配当の根拠を挙げ説明されなければいけないところもあるが、それはそれぞれについて述べる後段に譲りたいと思う。

これら地図上の位置と方位の相関関係は、すなわち日琉における他界と方位の問題に置きかえられるものである。前稿においても示したが、さらに本稿の展開上からも、また多少の加筆訂正もあるの

においても太陽の運行に従ったものであることも一致していた。特に古琉球のオモロが「明けまもどる」(十三—825)、「明けもどろの花」(十三—851)「太陽が穴」(十一—524)「太陽の穴の瑞日」(十一—531)と謡い、宇宙の有象無象の輪廻転生の哲理が、この太陽の運行に重ねられ、やがてこれがニライカナイ信仰を形成するに至ったのであろうと想定した。後にニライカナイは、本稿でこれから述べていくように、陰陽五行思想の哲理と邂逅し、受容していく過程で、方位が区々に設定されていくことになるが、それでもなお、根幹的・発生的原初の姿は失なわれることなく、今日に至るまで東方に設定されることが多いのは、古代信仰に根ざした観想であると考えられる。右に挙示した信仰軸で、水平(東西)軸信仰が顕著に見られることによっても、これは首肯されてよい。

古代日本においても事情は全く同様であった。天孫ニギノ命が天降りに選んだ地は、「此地は(中略)、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地」と言挙げして宮居を定めた。朝日・夕日の直刺すところが最大の理由であった。伊勢皇太神宮も「朝日来向国。夕日来向国。浪音不聞国」とあって、旭光の照り徹る地としての条件が不可欠であった。奥津城も「朝日照る岡辺」が好んで求められている。さらに決定的なのは、よく引き合いに出される「聖」の語源がある。「聖」は、語源的には「日知り」であるとされる。「日」は太陽を指し、「知り」は、治める、領有する意である。つまり「日知り」は、太陽の運行を完全に掌握し、農耕暦に生かされる力が要求された古代王の不可欠の条件であったのである。不断に繰り返される太陽の生と死、輪廻転生は、人間の誕

生と共に人が求めてやまない永遠の命と映じた。同時に農耕民族にとって、太陽の運行を農耕暦に生かし切ることは切実な問題でもあった。かくして、日琉共に古代王は、自らの輪廻転生の永遠の命を太陽に求め、自らを「日知り」「日の御子」あるいは古琉球においては「てだこ」(十一—512、日の神の子)、「てだかうち」(五—45、日の神の末裔)と位置づけ、やがて太陽の昇る東と、落日の西を最重要他界として、あるいは祭式的実修の基本的な方位として把握していったものと考えられる。そして、特に古琉球においては、水平(東西)軸の古代固有信仰を保有しつつも、明確に中国の陰陽五行思想への濃厚な傾斜が認められたことも、また前稿において種々例証してきた通りである。

では、他の二、三、四の信仰軸との関係はどうであろうか。またこれら他界と方位の信仰軸の新旧関係はどうであろうか。変遷の背後にいかなる契機が探り当てられるのであろうか。問題は大きく、高く、深い。次にいよいよこれと取り組み、不十分ながらも臆説を提出し、御示教を仰ぎたいと思う。

三

さて、二の垂直軸の問題に移るが、水平軸から垂直軸への移行過程・上昇過程は、日琉共に同一の発想方式である。筆者もかつて琉球王府の垂直表象的神観念、換言すれば他界観について考察を加えてみた。⁶⁾ 縷述の煩は避けたいので、詳細は拙論をご参照いただければ、本稿の理解が促進されるかと

思う。垂直軸への移行を志向するのは、おおよそ次のような理由によるものと想定した。

すなわち、ヤマトの覇者も琉球の王者も、飛躍的な発展・権力の強大化が達成された時点で、自己の出自を神聖化した歴史認識を深めていった。同時にそれは、自己の権力の神権統治を論理化していく道すじでもあった。神権統治の由来、絶対性、永遠性、尊厳性を保証しようとする「政治的動機」の高まりは、おのずと神話・伝承へと目が向けられ、統制へと着手する方向に働いていく。古代の支配者は、いったん政治権力を掌握すると、ほとんど例外なく思想的統制へと進んでいく傾向を見せる。思想的統制とは、宗教（神話）を最大のターゲットに据え、自己の統治原理、政治理念に奉仕させ、政治神学としてふさわしく秩序だて、加筆・訂正・潤色へと手を染めていく過程となる。

その場合重要なことは、我と彼とを峻別し、己の出自の神聖性を誇示しつつ、神権統治の絶対化、永遠化、尊厳化を確立する統治原理の顯示こそが最大の目的であるから、必然的に常民と等しい神觀念に立脚する性質のものであつてはならないという点である。そこで、ヤマトの覇者は、高天原——大和香具山——黄泉国、古琉球の王者は、オボツ・カグラ——首里（聞得大君御殿）という垂直構造の宗教世界観を産み出していったのである。高天原の聖空間である大和香具山はヤマト全体の宇宙図式に置き直すと、高天原——葦原中国となり、古琉球では、オボツ・カグラ——島という版図になる。ところで、全体的・宇宙図式的発想で捉えられた垂直構造の何げなく命名された呼称の中にも、実は権力者の並々ならぬ思想的統御の発露が探り当てられる。宣長は、「葦原中国」を解して「葦原ノ中ッ

国とは、もと上ツ神代に、高天原よりいへる号にして、此御国ながらいへる号にはあらず。さて此号の意は、いといと上ツ代には、四方の海べたは、ことごとく葦原にて、其中に国処は在て、上方より見下せば、葦原のめぐれる中に見えける故に、高天原よりかく名づけたるなり。かれ古事記書紀に、此号はおほく天上にしていふ言にのみ見えたり。」と断を下している。この碩学の眼光の鋭さには、毎度のことながら頭が下がる思いである。宣長説からは、神話述作者の二つの重大な意図が引き出せると思う。第一は、「高天原よりいへる号にして」「上方より見下せば」「高天原よりかく名づけたるなり」と指摘している点である。すなわち宣長は、高天原——葦原中国——黄泉国の垂直構造の宗教的世界観を意図した宇宙図式を明白に指説しているのである。第二点として宣長は、「高天原よりいへる号」であるのであり、「此御国ながらいへる号にはあらず」と明言する。天孫氏族が、神権統治の論理化という「政治的動機」によって、新宗教機軸を取り込んだ新しい世界観の確立を意図した時、必然的にその主体は自らの権威の淵源高天原に注がれており「高天原よりかく名づけたるなり」といつているように、発想においても命名においても高天原を中心に置いた政治的次元の所産であることは言うまでもない。西郷信綱氏は「一般に原始的社会では、名づけることは対象を存在せしめ、かつ所有することを意味するが、高天原の原からかく名づけられたことは、それが高天原の原との関係において存在し、高天原の原によって所有されることであつた。」と両者の「魔術的連関」を強調されるが、肯綮にあつた主張であらう。

古琉球の「オボツ・カグラ」と「島」の関係も、記紀のように具象性には欠けるが、やはり統治者の側から提示されたきわめて政治的な所有関係（島は「占む」と関係があり、占有を意味する。）にあることは、他のオモロに徴しても認められることである。

このように、日琉の垂直表象觀念が、政治的次元の所産であることは間違いないがなろうと思われる。さらにこの垂直表象は、一般に北方系民族に顕著な宇宙図式と目されていることも周知のことである。ところで、すでに述べたように、日本固有信仰と考えられる水平（東西）表象觀念は、天象の最たるもの、すなわち太陽の運行に依拠するものであることは、日琉共に異論のないところであった。

では、北方系民族の垂直表象は、いったい如何なる思考觀念に基づくものであろうか。たとえ権力者に政治的宗教的統治原理の顯示が迫られていた事情があつたにせよ、外来思想をこれほど見事に定着させていった裏には、受容を容易ならしめた理由が考えられるはずである。次にこの点につき考察を進めてみたいと思う。

すでに百家が口を揃えて言うように、古代中国哲学思想は、天文学と不離一体に結びついているのが最大の特徴とされている。「古代支那に於ては、天文学はすべての学問を綜合する理論を説くものである。それは哲学でもあり、物理学でもあり、道德学でもあり、政治学でもあり、宗教でもあり、予言学でもある。故に天文学は諸学の源頭に立つものとも言ひ得る。それは現代の用語としての天文学とは大にその意義を異にして居る⁽⁹⁾。」とすでに先蹤が看破した通りである。宇宙生成を説き、神を

説き、政治・道德・予言を説き、その他兵法・産業・芸術・医術のあらゆる面を網羅的に取り込んだのが、陰陽五行の哲学であつた。そしてこの陰陽五行思想こそがわが日琉の古代の支配者の統治原理と深甚に関係するものである。日琉の古代信仰軸の解明、とりわけ、垂直軸、戌亥・辰巳軸、子午軸の問題は、中国宇宙哲学である陰陽五行思想の光源なくしては、その解明は不可能であるとさえ思われる。日琉の権力者は著しく信仰軸に陰陽五行思想の彫琢を加えた痕跡が探り当てられるものである。中国古代総合哲学の森は果てしなく深く暗く、高く厚い壁は目測さえもおぼつかない。不敏な筆者の力を以てしてはまことに勝ちすぎていて、すでに幾度となく挫折と失望を繰り返してきた。しかし、そのたびごとに、信仰軸の秘密を解く緒はここだという思いを強くもしてきた。意をつくし得ぬ恨みは大きく、随処で壮絶にこれと戦い、ぶざまに力不足を露呈することになるが、それでも敢えて挑戦してみたい。長い間、古琉球の人々の幾重にも垂れこめた他界のヴェールを、一つ二つと引き開けていくうちに、ついに筆者もしたたかに彼らの思いにのめり込んでしまった。まだ何枚かのヴェール越しではあつても、いったん光を当て、近づき、彼らの思考方式に触れ得たやに思っている筆者の考えが、果して妥当かどうか、御示教を仰がねばなるまい。以下は、長期戦が見込まれる格闘の途中報告である。

四

陰陽五行思想とは、言うまでもなく、陰陽説と五行説により構成されている中国古代哲学である。古代哲学とは言つても、前述のようにすべての学問を包摂するので、いきおい複雑・難解をきわめることになる。しかし、有難いことには、すでに先蹤の偉業があり、これを導き手に頼み、本論の展開上、以下概観してみたいと思う。

陰陽説は、原初、宇宙は混沌としていて、混沌という一元の中から、陰の氣（「氣」とは、人間が呼吸する「いき」のようなものとされる）と陽の氣という二つの相対的な氣が派生し、これにより万物の生成を説くものである。宇宙生成論を問題にする時、まづ先に俎上に載せられるのは「淮南子」である。同書は、古代中国の国初開闢から漢初に至るまでの百科全書と目されるものである。同書の「天文訓」は、陰陽による宇宙生成を説くが、以下に示すのがそれである。

天地未だ形はれざるときは、馮々翼翼々洞々漚々たり（無形の貌の譬）。故に大昭と曰ふ。道は虚郭（無）に始まる。虚郭は宇宙（宇は空間、宙は時間）を生じ、宇宙は氣を生ず。氣に漢垠あり。清陽なるものは薄く靡きて天と為り、重濁なるものは凝り滞つて地と為る。清妙の合ふは専まること易く、重濁の凝るは結ぶこと難し。故に天は先づ成りて、地は後に定まる。天地の精を襲ぬるを陰陽と為し、陰陽の精を専むるを四時（春夏秋冬のこと）となし、四時の精を散ずるを万物と為

す。積陽の熱氣は火を生ず。火氣の精なるものは日と為る。積陰の寒氣は水と為る。水氣の精なるものは月と為る。⁽¹⁰⁾

以上が件の宇宙生成を説くところである。陰陽は、マイナス——プラス、暗——明、濁——清、重——軽という具合に、常に相対的な性質を持ち、これが互いに強弱・消長の關係を保ちながら循環していることを説く。陰陽二元に派生するとは言うものの、もとはと言えば混沌という状態であり、「所謂無形とは一の謂なり。所謂一は天下に匹合なき者なり。（中略）大に渾して一となり、葉のごとくに累りて根なく、天地を懷養して、道の関門となり、穆容隱闕として、純徳独存す⁽¹¹⁾」とあったり、また、「洞として天地に同じく、渾沌として模を為す。未だ造られずして而して物を成す。之を太一と謂ふ⁽¹²⁾」とあるように、「淮南子」では、天地未分の混沌たる状態を「一」と言い、「道」と言い、「太一」と言ったりしている。陰陽説は別名「太一陰陽」とも言われるように、根本が一つであるという「一」「太一」の観点からすれば一元論となり、「陰陽」という分化・派生に注目すれば二元論にもなってくるのである。（基本的には一元論と考えるべきであらう。）

一方、五行説とは、宇宙万物の構成要素を、五元素（木・火・土・金・水）に置き、「行」とはその働きを説くものである。⁽¹³⁾五行説も五元素の作用・循環を説く点においては、陰陽説と類似性がある。この類以の働きによつても知れるように、陰陽説と五行説は、成立の先後關係も問題にはなろうが、「陰陽五行」と総括されるように、両者は互いに密接な相關關係にあることは言うまでもない。

以上がきわめて簡単に概観した陰陽五行説である。しかし、これが前述のように、すべての学問、あるいは天象・人象・地象のあらゆる根本に至って説き及ぶのであるから、その展開は高度・複雑・難解な様相を呈してくるのは必然である。

「他界と方位」の問題を考える時、天文学と結びついた陰陽五行思想の宇宙生成論と、陰陽の中枢觀念とされる「易」の思想の視点を欠くと、おそらくその解明は不毛に終わってしまうであろう。陰陽五行と天文学の関係も天文学の中に宗教の論理を包含するのであるから、問題の緒がここに潜んでいるであろうという狙いも、さして是はずれにはなるまいとの予測が立てられるものである。

陰陽五行と天文学の関係は、およそ次の通りである。

原初、混沌（太一、または太極）の状態から陰陽二氣に派生し、陰の氣が大地となり、陽の氣が天となったことはすでに述べた。陰の氣と陽の氣の精粹が、それぞれ月と日になったことも述べた。さらに天空における日月の交感・交合の消長・強弱は、五つの惑星を生ぜしめることになる。すなわち木星・火星・土星・金星・水星（これらは、古代肉眼で観察されたすべてであった）である。これら五星は、日月と共に常に天空を循環し、その作用がまた地象・人象における五元素（木・火・土・金・水）の消長離合に密接に影響すると考えられていた。日月五星はすべて天神とされ、地上および人間は、この天神の意志に順って行動することにより、平和と幸福を保つものとされた。日月星辰の中で当然のことながら、ことさら尊ばれたものがあつた。『史記』『天官書』に目を転じてみよう。

中宮は天極星（北極星を指す）、其一の明なる者は太一（天神の尊貴なもの）の常居なり。旁の三星は三公なり。或は曰ふ子の属なりと。後の句れる四星は、末の大星は正妃、余の三星は後宮の属なり。之を環りて匡衛する十二星は藩臣なり。皆紫宮と曰ふ。¹⁴⁾

すなわち、宇宙生成の劫初、すべてのものの生成のきざしとなり、陰陽を併せ持つ根本の氣を「太一」もしくは「太極」としたことは先に言及した。これが天文学と結びついて説かれた時、日月をはじめ天空にあつてすべて循環する星辰の中、「北極星」のみが動かぬ星として天空に輝やいている。動の中の不動の星——天文現象にすべての学問を帰趨させる古代中国哲学が、これに注目しないはずはない。天空の動かぬ星「北極星」は、やがて陰陽の根本たる「太一」「太極」と結合していくことはけだし必然であつた。同時にこの太一・北極星こそは、天神の最も尊き高き神とされ、傍の三星は三公または三人の子供とされ、四星は正妃および後宮、十二星は護衛の藩臣になぞらえられ、そこは「紫宮」と呼ばれた。動かぬ北極星に、天神の最高神「天帝」をなぞらえ、そこを天帝一家の宮処と考えていく思考経路は、きわめて当然のなりゆきであつた。かくして地上の天子と天上の天帝が相即不離な関係に説かれるであろうことは必然以外の何ものでもあり得なかつた。地上の制度や儀礼・祭祀のあらゆることが、天帝の意志に順ってなされることにより、平和と安寧がもたらされるとする統治原理が確立される緒は実にここに潜んでいるのである。「善良なる政治は、天子の善良なる心から発生すべきものである。善良なる心は天帝の命令に順ふものである。天帝の命令は天文の上にも現れ

る。そこで天文学と道德学と政治学とは一貫した理法を保有することになる。支那古代の思想の特色はかくの如き点に存する⁽¹⁵⁾」との指摘は首肯せしむるに足りよう。

同時に見落としてはいけないのは、先に示した「天官書」の後半である。

北斗七星は、謂はゆる旋璣玉衡、以て七政を齊ふるものなり。(中略)斗を帝車と為し、中央に運り、四郷を臨制し、陰陽を分ち、四時を建て、五行を均す、節度を移し、諸紀を定むる、皆斗に繋る⁽¹⁶⁾。」

天帝の紫宮である北極星について述べた後、続けて北斗七星について説き及ぶ。すなわち北斗七星は別名を「旋璣玉衡」といい、北斗七星の作用は、日月五星の政、日月五星の運行——つまり七政を斉える重要な役目を負っている。また北斗七星は、動けぬ天帝の乗車となつて天空を運り、上下左右を治める。陰陽(夏冬)を分かち、四季の推移をはかり、五行を整え、二十四節気を順調に促し、さらにその他もろもろの政法を司る。これらは皆北斗七星の重要な作用によるものであると説くのである。以上は陰陽五行と天文学との関係において、北極星と北斗七星が特別に把握されていたことを示すものであった。吉野裕子氏は、このことに注目し、「大嘗祭」の祭祀構造が、北極星と北斗七星をうまく習合させて構成されていることを解き明かしておられる⁽¹⁷⁾。くり返しまとめてみると次の二点になる。

第一点は、天空にあつて絶えず循環しながら照り輝やく日月星辰のうち、北極星のみは常に不動であつた。ここに着目し、北極星を天神の中で最高の神・天帝と位置づけた。人間に家族があるように

天帝にも家族があつて、北極星付近の星々を家族関係、主従関係に配し、天帝一家の処所を紫宮と名づけた。地上における最高権力者天子は、常に天帝の命(天文現象)に順い統治すれば、平穩で幸福な国家建設が達成されること、このことは地上の天子と天上の天帝が、陰陽という宇宙生成の二気によって密接重要に結ばれているということであり、ここが古代中国哲学の根本理念の発場であることは言うまでもない。

第二点は、不動の天帝と言うものの、循環・輪廻を根本に置いているから、天帝にも動が要請される。そこで北斗七星に目が注がれていく。すなわち北斗七星を「帝車」と位置づけ、天帝を乗車させ天空をかけめぐる必要があつた。何となれば循環・輪廻なくしては宇宙の生成は不毛なのである。すでに見てきたように北斗の作用は四季の推移や二十四節気の順調な輪廻を促すなど、機能的にはむしろ北斗七星の方が重要視されていたことに注目される。このことは、天文の実際的な面は、規則正しい北斗の運行の観察が、生活上のきわめて重要な指針となつていたことを示すことにほかならない。以上の二点が、本論の展開上、看過出来ない視点である。日琉の宗教的他界観の推移の新機軸は、実にこの点に依つて形成されていったのである。

では、ここで、目を日琉の古代社会に向けてみることにしよう。まず、古代日本における陰陽五行思想の影響・受容を探ってみたい。すぐに誰もが挙げるのは「日本書紀」冒頭のくだりであろう。

古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を合

めり。其れ清陽なるもの、^{たみひ}薄靡きて天と為り、^{おもくにご}重濁れるが凝りたるは淹滞^{つづ}めて地と為るに及びて、^{くはしたへ}精妙なるが合へるは搏り易く、^{しちが}重濁れるが凝りたるは^{かたたま}竭り難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に、^{かみ}神聖、其の中に生れます。

故曰はく、^{あつちひ}開闢くる初に、^{うづつち}洲環の浮かれ漂へること、^{たど}譬へば^{あそい}游魚の水上に浮けるが猶し。時に^{ひつうのあな}天地の中に一物生れり。状^{かたち}葦牙の如し。便ち^{すなわ}神と化^な為る。国常立尊と号す。^{くにのこたたらとこ}

問題の書紀冒頭の開闢譚である。後半部の「故曰はく」以下「国常立尊と号す」までの啓発生成観を基底にした創成観と、それ以前の陰陽思想および天地剖判思想を下敷きにした創成観とは、著しく異質なものをつなぎ合わせたものであつて、両者が有機的に一つながりの創成観とは見なされないことは、万人の等しく一致する見方である。後半部の創成観がわが国自生の観想であることも又異論がない。問題は前半部となる。

まずは、鎌倉中期に成立を見た「⁽¹⁹⁾日本紀」の著者・卜部兼方の説くところを傾聴しよう。「日本書紀三十巻無⁽¹⁹⁾序。但師説初文天先成而地後定。然後聖生二其中一焉。已以序文。」と明示するように、二つの明らかに異質な開闢譚を載せる書紀冒頭の部分は、漢籍を借用しての序文であるとする見方がある。しかも漢籍の出典を以下のように追跡した。すなわち、「天地未だ割れず」は「⁽²⁰⁾広雅」に依拠し、「⁽²¹⁾鷄子」が「⁽²²⁾礼記」月令正義、「⁽²³⁾牙を含めり」が「⁽²⁴⁾春秋緯」、「清陽なるもの、⁽²⁵⁾薄靡きて天と為り」以下「天先づ成りて地後に定まる」までが「⁽²⁶⁾淮南子」天文訓が出典になっていることを明らかにしている。⁽²⁰⁾

している。

この考えは宣長に継承された。曰く「⁽²⁷⁾漢籍の文を取て、かざりに書⁽²⁸⁾加へ賜へる者にして、いとさかしだちうるさし、かゝる類の漢籍の説は、みな後ノ人の臆度⁽²⁹⁾の妄説にして、古ノ伝へに背けること、初メノ巻に委く論へるがごとし、ゆめゆめ惑ふことなかれ」「是はみな漢籍どもの文を、これかれ取集めて書き加へられたる、撰者の私説にして、決めて古の伝説には非ず」とこちたく排斥した。飯田武郷も「わが皇國の古伝にハ非ず。漢籍三五略記淮南子等の文にて。彼土の上古の古伝説なり。(中略)然れハ今一層上りて。天地の混沌たる原始を語出んとて。漢籍の説を取出て発端に記し。其に接けて我國の古伝を故曰と語出たるなり。(中略)此ノ漢土の伝はた彼國に。上古より語伝へたるものとハ聞ゆれと。精妙之合搏易々。重濁之凝竭難シなど。人智の推測に亘りて。純粹なる古伝とおもハれす。是彼國にハ。何事にも理を旨と先に立て。語伝ふる風習なれハ。皇國の朴質なる古伝とハ。こよなく。誠に木に竹を続⁽³⁰⁾きたらむ如く通ゆるなり。されハ此数句は。先輩も既に云れたる如く。この紀の序文と見てありぬべし。」⁽³¹⁾と言つて、これらがわが上古の古伝のように言うのは「いとあぢきなし」と斥けた。さらに、神代史研究に大きな足跡を残し、右の系列下に位置づけられる津田左右吉がある。津田は「此の思想は書紀に於いて初めて採用せられたのではない。書紀に一書として載せてある旧辭の異本六本の中、三本までには天地剖判の語がある。他の一本に天地混成之時とある

のも、此の剖判説を予想しなくては解し難き文字であり、さうしてそれは淮南子などの思想の一淵源をなしている老子の有物混成先天地生から転じて来ているらしい⁽²³⁾と主張している。

以上、右に通観してきた説示は、卜部兼方や本居宣長、飯田武郷の序文説を含むものの、共通の視点に立脚したものである。いわゆる「表現」においても「思想」においても、共に支那文献からの「借用」であるとする見方である。

当然のことながら、右の「表現・思想借用説」に異論が提出された。

鈴木重胤は「古天地未剖陰陽不分より、然後神聖生」⁽²⁴⁾其中一焉と云迄の文は、別天神の御名を省きて、御事跡を以て伝へたる古語なり。然れども三五曆記及び淮南子、春秋緯など云ふ漢籍に依て、文を載せるが故に、人皆我が古説に非るが如く思ふめるは、固陋なる事なり。凡て御紀の中なる古伝共に、少も彼に似寄れる事有れば、当否は姑く措て、彼文に擬用^{ナゾウ}らるる事常なれば、難む可きに非ず⁽²⁴⁾という立場を示した。これは「表現借用・思想非借用説」である。

津田敬武も鈴木⁽²⁵⁾の立場に立ち、「此の神話の文句が支那に起源を持つことに就いては何等の疑もない。けれどもその思想が支那の典籍によつて初めて与へられたもので、我が国古来の思想の現れでないと速断することは、暫くさし控えなければならぬ。此よりも古く既に類似の神話が存在して居たようなことはあるまいか」「その要素は、支那の古典によつて刺激を受ける以前から既に存在して居たものを言ひ現すためにのみ支那古典の文句を籍りと見ることも可能である⁽²⁵⁾」として、類似の観想

は我が国にもあり、表現のみを借用したとするのである。

神話学の泰斗・松村武雄も、創成神話の種々の構成素を分析し、問題の天地剖判も、日本民族に独自に、素朴に包懷されていた痕跡を綿密に追ひ種々例証した上で、「天地の開闢若しくは剖判という驚異すべき問題そのものへの解答が、同じように漢土にも我が国にも存するという事実⁽²⁶⁾に強く心を惹かれて、切言すれば、神話の構成素に於ける差別相よりも寧ろその同相が、より強く彼らの注意と興味をそそった筈であり、かくしてそこに強い親密観・類縁観が湧き立つたところに、漢土の天地開闢神話の、『日本書紀』冒頭への誘入があった⁽²⁶⁾」と見ている。

「表現」「思想」の借用・非借用の問題は、この場合神話学の発生論・伝播論・系統論など根底に関わる部分であり、眼光紙背に徹する底の周到さで対峙すべきは言うまでもない。右に見てきたように、すでに幾多の先学の精力的な取り組みがなされており、浅学な筆者のおしはかりごとはもはや無用である。だが、この問題は本論と不可分である以上、筆者がどのように受け止めているかは示さねばなるまい。

表現の借用については、異論の余地は皆無であろう。思想の借用といった場合の思想とは、挙示されている漢籍の典拠内容からして、陰陽思想・五行思想ということにならう。該思想は、一般的に漢土固有信仰と考えられているが、古代日本は該思想を祭祀習俗・呪術として、統治者が強力に導入していることは、先にも述べたように吉野裕子氏の種々の労作の中で例証されているところである。受

容を可能ならしめるにはそれだけの素地がなければ、定着度は浅く一過性のものに終ってしまうであろう。しかし、その後においても命脈を保ち続け、定着度の強さを思わしめるに十分なものがあるの
で、日本古代社会にも受容を促進させる素地があったと思う。漢籍を踏襲し、祭祀的に定着させた背後には、類同相による強い近親感があったのだと思う。古事記でも天が先に成り然る後に国土生成が遂げられており、だからこそ、序文も「それ、混元既に凝りて、氣象未だ效れず。名も無く為も無し。誰れかその形を知らむ。然れども乾坤初めて分れて、參神造化の首となり、陰陽ここに開けて、二靈群品の祖となりき」と合理的な外来思想をスナリ受け入れたのであり、これは、「あちらの思想は、はやく書物となつて多く伝えられたので、自然にこれを崇信するに至つた」事情もあつたであろう。これらを肯定しつつ、受容を容易に可能ならしめたのは、「異国趣味の民族性にもよるが、古代信仰の中にその習合を可能にさせるものがあつたからである。その共通点は、万象の二元的把握、輪廻の思想、穴の重視があげられよう」と、吉野裕子氏は犀利なる論断を下されたが、吉野氏のいわれるところに聴従して誤りないものと思われる。

右に通観してきたように、古代日本における陰陽五行思想の受容、呪術面における応用は、まず確実であろう。むしろ、我々は、もっと積極的にこの光源からの照射を試行すべきではないかと思われるのである。

以上が、陰陽五行思想の概要と、上古における該思想との邂逅・受容の概観である。ところが、実はこの陰陽五行説は、根本理念が「易」の陰陽思想と密接であることは言うまでもない。先に筆者は、日琉の古代信仰軸の移行過程の考察は、陰陽五行思想とその中枢観念とされる「易」の思想の視点を欠落させると説明は不毛であると述べた。(270頁)

右に古代日本における五行思想の受容について見てきたが、古琉球のそれに言及する前に、ここで陰陽五行やその他の学問の根本に位置するとされる「易」の思想をも概観しておきたい。

易は古代中国の占いの書である。占いの書とは言つても、經典として四書五經のうちの「易經」であり、「東洋哲学の總奥を啓く書」として、經典の筆頭に置かれていることは周知のことである。次に引く本田氏の言は、この書の性格と価値をよく示すものである。「つまり儒教の經書の一つである。『經』の字はもと織物の縦糸の意味。それからすじみち、道の意味になる。人の生きる道、天下国家を治める道、ひいては宇宙の奥にひそみ、宇宙を動かしている道、それを説き明かしたのが『經』である。それらは聖人の作成あるいは編纂にかかる神聖な書物であり、あらゆる真理の源泉とされた。

「易」、「詩」、「書」、「礼」、「春秋」を「五經」とよび、漢代から清代に至る二千年(前二世紀—十九世紀)の間、キリスト教国におけるバイブルのような權威をたもつた」ものである。

唐突だが、まずこの易のわが国への伝来について瞥見してみよう。

継体紀に「百濟、姐弥文貴將軍・州利即爾將軍を遣して、穗積臣押山(注略)に副えて、五經博士段楊爾を貢る」とあり、同紀十年には「別に五經博士漢高安茂を貢りて、博士段楊爾に代え

むと請ふ⁽³²⁾」とある。五経博士とは、むろん先に示した『五経』の教官のことであり、百濟から五経博士が派遣されたということは、陰陽道の確実な伝来を思わしめるに十分なものである。

欽明紀には、「六月に、内臣（注略）を遣して、百濟に使せしむ。（中略）別に勅したまはく、『医博士・易博士・曆博士等、番に依りて上き下し。（中略）又卜書・曆本・種々の藥物、付送れ』とのたまふ⁽³³⁾」とあって、医博士・易博士・曆博士と共に、多くの易占の書が伝来したことが見えている。

推古紀には、「冬十月に、百濟の僧觀勒来けり。仍りて曆の本及び天文地理の書、并て遁甲方術の書を買ふ。是の時に、書生三四人を選びて、觀勒に学び習はしむ。陽胡史の祖玉陳、曆法を習ふ。大友村主高聰、天文通行を学ぶ。山背臣日立、方術を学ぶ。皆学びて業を成しつ⁽³⁴⁾」とある。書生三、四人を選抜して曆本及び天文地理書、遁甲方術書（占星術）を学ばせたことが伺える。これらが、易や五行と密接な学問であることは言うまでもない。しかも、それぞれがよく修得して、指導的役割を担ったであろうことも推察される。この推古朝に聖德太子が摂政として、冠位十二階や十七条憲法の政定発布に、また国史編纂に陰陽五行説を使っていることは、つとに幾多の先学が明らかにしてきた通りである。以来、祥瑞改元（瑞兆現象によって改元する陰陽思想）が行なわれたのは周知のことである。

天武紀には、「淨広肆広瀬王・小錦中大伴連安麻呂、及び判官・録事・陰陽師・工匠等を

畿内に遣して、都つくるべき地を視占しめたまふ⁽³⁵⁾」とあって、官人として陰陽師を登用したことが知られる。

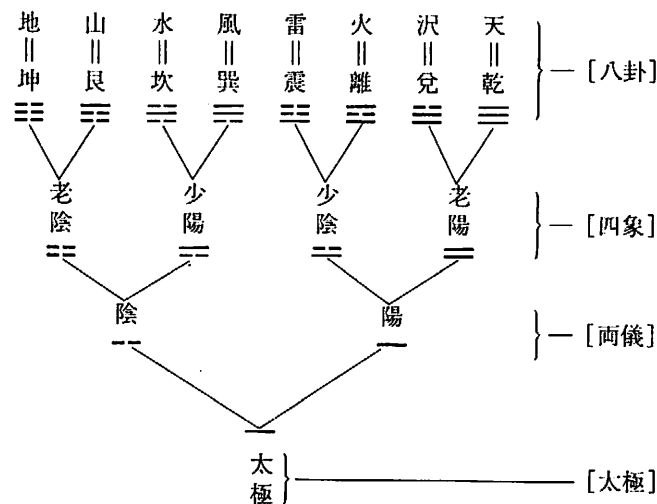
続いて持統紀には、「陰陽博士沙門法藏・道基に銀二十兩賜ふ⁽³⁶⁾」とあって、法藏と道基が陰陽博士として知られる初見の記事がある。

以上の伝来記事にはからずも見えているように、わが国では、易のことを「陰陽道」といい、易にたずさわる人を「陰陽師」「陰陽博士」といった。わが古代社会にあつては、四季の循環や方位などで、国家社会や、政治・道徳・予言など、あらゆる面を網羅した「易経」は、近代科学としてかなり速やかに受け入れられたと見え、すでに令制の中で「陰陽寮」が設置され、官人として「陰陽師」六人が配置されている。⁽³⁷⁾「陰陽頭」「陰陽属」「陰陽允」「陰陽助」「陰陽家」「陰陽師文」「陰陽生」「陰陽得業生」などでも知られるように、わが国では「易」を言うのに「陰陽」の語を使用する。

伝来記事の中で瞥見された「陰陽」の語が雄弁に示すように、易の思想の中核観念は、陰と陽である。自然界および人間界の百事百般をすべてこの陰陽の二つにふり分けて捉えることが、まず易の大原則である。

人象にとれば、男—女、天子—皇后、君主—臣下、父—子、夫—妻が陽陰の関係となる。

宇宙にとれば、天—地、日—月、明—暗、時間にとれば、昼—夜、夏—冬、春—秋、場所にとれば、上—下、高—低、前—後、性格にとれば、陽氣—陰氣、積極—消極、リーダー—凡人など、ありとあ



第3図 八卦図

(注1：大極の符号一と陽の符号一は同一の意ではない。
 (注2：陰陽二氣は下から順次上に発展・派生するとされる。)

の「小成の卦」を組み合わせて(例えば
 三三や三三のように)、六爻の卦を構成し
 ていく。六爻の卦を「大成の卦」というが、
 八卦を最大限組み合わせると8×8で六十
 四の卦が出来上ることになる。この六十四
 卦で、易は宇宙観・人生観をはじめ、天
 文・地理・動植物・宗教・政治・医術・
 予言など、ありとあらゆる百般の事象を説
 き明かしていくのである。以上の他にも、
 説明されるべき易の根本理念があるが、そ
 れらは本論の展開の中で触れていきたいと
 思う。

さて、右に古代日本における、陰陽思想
 (易)と五行思想の受容過程を大雑把に
 辿ってみた。「易」も「五行」も、吉野氏
 が幾度も力説されてきたように、共にかな

らゆることが、陽陰という相対的な原理で把握されることが第一の特色と言えよう。だが、あくまで
 陰陽は相対的であり、絶対的・固定的ではない。「男は女に対して陽であるが、子として親に対すれ
 ば、その男の子は陰である。女は陰であるが、親として子に対すれば陽である」という具合に、相対
 的・流動的で、陰陽はまた無限に変化作用することが易の思想である。

そして、この陰陽をあらわすのに符号が使われる。一は陰を、一は陽を表わす。この符号を爻とい
 い、それぞれ陰爻、陽爻という。原初、陰陽が生ずる以前は、陰陽が混じり合って混沌とした状態であ
 った。この状態を「太極」と言った。この「太極」から陰陽に変化作用するプロセスを次のように
 説くのである。「易に太極あり、これ兩儀を生ず。兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず」と説か
 れている。太極—兩儀—四象—八卦という発展・派生の状況は、次のように図示(朱子の「本義」に
 よるとされる)して説かれている。

八卦(乾兌離震巽坎艮坤)は、これをもろもろの事象に充当させる。「周易説卦伝」はこれら八卦
 の属性を挙示するが、第3図に示した自然現象(天沢火雷風水山地)は、その一例にすぎない。これ
 が自然や人生の百般の事象に配当されていくのである。八卦は三爻(例えば三三や三三)で構成され
 るが、三爻は天地人の三才(才とは、はたらきの意)を示すとされている。天・地・人の三才の相関関係
 を説くのが易の根本思想であるから、三爻で構成されるのは、けだし宜々しい。しかし複雑広汎な自
 然現象をわずかに八卦だけでは、いかにも言い尽くせない。八卦の三爻を「小成の卦」とも言うが、こ

りの影響があるものと思料される。

ではこの点につき、古琉球はどうであろうか。この問いに対し、消化不良は率直に認めつつ、だが次にいくつかの実証的な答を用意してみた。

第一点として、「易」や「五行」思想に、直接的につながる第一級史料とも言うべきものがある。

琉球史の嚆矢『中山世鑑』に、羽衣伝説で粉飾された「察度王統」の樹立記事があるのがそれである。天女は奥間大親との間に一男一女を生じた。この一男が、後に察度王として、第三王統の開祖になるのだが、察度は成人になっても父の野良仕事を一向に手伝う風もなく、まずは親不孝な息子であった。その頃、勝連城主には、類まれな美貌の姫がいたのだが、親不孝な察度は、こともあるうにこの姫に、乞食姿のまま求婚を申し入れた。むろん城主をはじめ城中の者は、狂人と思い追い返そうとする。ところが一部始終を妃と共に窓ごしに見ていた姫は、「この男こそ、天子の蓋を戴く者です。婿に取つて下さい」と懇願する。むろん、王も妃もこれを許すはずはない。だが姫は「この男を婿にしないのであれば、一生、男は持たない」とやり返した。困った城主は、もともとが博学大知の人であったので、「易ノ占ヲ見ントテ、周易ヲ開テ見給ニ、乾ノ初九ニ当リタリ」とあって、以下のことが見えている。

(イ) 乾元亨。利貞。

初九潜龍勿用。

(ロ) 象曰。大哉乾元。万物资始。乃統天。雲行雨施。品物流形。大明終始。六位時成。時乘三六龍一。以御天。乾道變化。各正性命。保合大和。乃利貞。首出庶物。万国咸寧。

(ハ) 象曰。天行健。君子以自強不息。

(ニ) 文言曰。元者善之長也。亨者嘉之会也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子礼仁足以長人。

嘉会足以合礼。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰乾元亨利貞。

(ホ) 初九曰。潜龍勿用。何謂也。子曰龍德而隱者也。不レ易乎世。不レ成乎名。遯世无レ悶。不レ見レ是而无レ悶。樂則行レ之。憂則違レ之。確乎其不レ可レ拔。潜龍也。

(イ) (ホ)の符号は、便宜上、筆者が附したものであるが、わざわざ「周易ヲ開テ見給ニ」と決断の根拠が「周易」に立脚することを示し、あまつさえ、周易の直接引用をする。すなわち「周易上経」

「象伝」「象伝」「文言伝」の附された、「(三三)乾(乾为天)」が出典箇所である。枚数の関係上、詳説は省きたい。「周易」については、本論で引用している、現代語訳を載せた入手が簡単な好著がある⁽⁴⁴⁾ので、閲覧はそちらに譲りたい。ともかく右に出た「乾为天」の「初九」の易は、きわめてめでたいものであったので、城主は姫の願い通り彼を婿に迎えた。以下は省くが、この乞食風情の青年が、第三王統を樹立し特に農耕面での功績が著しい察度王その人であったのである。

易は現代でこそ、占いの世界にのみ生きているので、とかく迷信として斥けられがちである。ところが発生期から、この思想が崩れだす中華民国および人民共和国の成立以前まで、すなわち前漢の時

代から清朝崩壊に至るおよそ二千年もの間、易は常に中国人にあつては人生の規範であり、かつ帝王の書とも言われてきた。「周易」が国王や王族関係者の手に成つたことと、一読すれば明確なように「易経」そのものの中に政治学や為政者の心得、天下国家が論ぜられている。

子曰く、易は其れ至れるかな。夫れ易は、聖人の徳を崇くし業を広むる所以なり、知は崇く礼は卑し。崇きは天に効い、卑きは地に法る⁽⁴⁵⁾。

知は天の高明を目指し、礼は地の謙下を手本とする。聖人の徳は、天地の知礼を尚び、道德を成就することにあり、

子曰く、それ易は何する者ぞ。それ易は物を開き務めを成し、天下の道を冒う。かくのごときのみなるものなり。この故に聖人はもつて天下の志に通じ、もつて天下の業を定め、もつて天下の疑いを断ず⁽⁴⁶⁾。

事物の蒙を明らかにし、疑わしいところを断じて、天下の事業を施すのである。易は、占いによって疑惑を断ち切る意味では占筮の書である。しかし、その依つて立つところが、天という大宇宙と地という小宇宙を取り込んで、両者の相即不離な関係を、しかもすべての学問を包摂して展開する宇宙論的哲学、「天人之学」であつたから、ただに占いの書にとどまらなかつた。それは、孔子や老子に多大の影響を与え、「五経」の筆頭に置かれていることによつても首肯されることである。

勝連城主も姫の婿取りがたんなる婿取りであるばかりでなく、民政の安定を担うのであるからこそ、

神意を聞く高度な政治的判断の認識のもと、「周易」に訴えたということであろう。「中山世鑑」に見る「周易」の直接引用は、他にも多いが、本稿でいちいち問題にするに紙幅に余裕がない。他日、全面的に検討する機会を持ちたいと思う。

次に「中山世譜」と易との係わりを示す好例を挙げてみよう。

天地未_レ分之初。混沌沌。無_レ有_二陰陽清濁之辨_一。既而大極生_二兩儀_一。兩儀生_二四象_一。四象變化。庶類繁_レ。由_レ是天地始_二為_二天地_一。人物始_二為_二人物_一⁽⁴⁷⁾。

右は「中山世譜」開卷第一、歴代總紀に見る国初創成譚である。第3図に示した、易の根本觀念である、太極—兩儀—四象—八卦（庶類繁類）の生成發展を説く「繫辭上傳」からの丸ごとの引用（282頁）であることに驚かされる。かくして「中山世譜」と「易経」との深い関わりも以下推して知るべしである。ことに「世譜」の成立事情、すなわち被関の対象が中国に置かれていたことを思う時、これとさらな影響が予想されるが、これも全面的な検討は後日に譲るほかない。

「琉球国由来記」「王城之公事」「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」も、易や五行の理による祭祀構造が一瞥した限りにおいても散見される。やはり一例を挙げれば、「王城公事」の十一月の祭祀に「冬至」の祭祀がみられる。「聖上於玉庭」、拝北極⁽⁴⁸⁾。規式元日同也」とあつて以下祝文を載せている。冬至に北極星を拝すことは、五行思想の影響以外の何ものでもないが、続けて同記は冬至の供物について、「冬至作_二餌者_一、閩俗作_二円時_一、称_二団円_一、男作_二餌三箇_一、女作_二餌五箇_一。表_二天地人之

三才、五行「者乎」(傍点筆者)と記し、祭祀習俗の濃厚な易や五行への傾斜を見せている。思うに王府の祭祀構造・習俗こそは、表に裏に該思想と不可分に係わっているものと思われる。これもあれもと思われるものばかりだが、すべて今後の課題である。

以上に挙示した「世鑑」「世譜」「由来記」の記事は、いずれも、陰陽説(易)と五行説のあらわな影響関係を示すものであった。しかも枚数の制限上、いずれも簡単に一例のみを挙示したにすぎないが、該思想との深甚な関係は、もはや学問的組上に載せて存分に論じられるべきは言うまでもない。この責めはすべて後日に譲りたいと思う。以上が、陰陽説・五行説の原典直接引用の動かぬ第一級史料のほんの一例である。その他にも以下に示すように、該思想への濃密な傾斜ぶりを窺わせるに十分な論拠が挙げられる。

陰陽五行思想の影響と想定される第二点として、易姓革命思想による王朝交替の論理が適用されていることが挙げられる。「陰陽五行思想では、唯一絶対の混沌から派生した天地は元来、同根であり、したがって天地は互いに交感しあうものとする。地の象は常に天に反映し、為政者の治世がよければ、天帝は瑞祥を下してこれを嘉賞し、これを扶ける。それに反し、もし政治が天意に背けば天寵は失われ、王朝は交替する。つまり天人相応の思想で、これによって革命の必然性が肯定され、これが易姓革命の原理となっている。一方、万物は流転し、その榮枯盛衰の自然の理によって宇宙の永遠性は保証される、という五行の原理からも王朝は当然、交替するものとされ、ここに五行終始説が生じた」

のである。易姓革命・王朝交替の原理が、五行の生成順(水・火・木・金・土)、相生順(木・火・土・金・水)、相勝順(水・火・金・木・土)のいずれによるかは、種々解釈があつて定まらないようである。しかし、王朝交替の原理が五行の輪廻に基づくことだけは確実な理念である。

大和朝廷は、万世一系を皇統譜の理念とするのであるから、原則的には易姓革命や王朝交替は起こり得ないはずだが、中国の思想哲学に心酔していた白鳳期の諸皇子達がこのことに無関心であったはずはない。そこで吉野氏は緻密な考証と鋭い洞察で、白鳳期の皇位継承に、五行終始説による五行循環の論理が導入されていることを、日本書紀の記事を五行思想に置き換える作業の中から解き明かす試みを展開された。大陸の思想・諸制度に深い関心を示した天智・天武・持統であつてみれば、とりわけ王朝交替の原理である五行終始説に無関心でいられたはずはなく、吉野氏の立論は、おそらく正鵠を得ていよう。

さて、この問題についても、わが古琉球は大陸との密月関係に正比例し、該思想への傾倒ぶりもむき出しで強い。

すでに定説であるが、琉球王朝は五度の王朝交替を見る。左記の通りである。

第一舜天王統 舜天——舜馬順熙——義本

第二英祖王統 英祖——大成——英慈——玉城——西威

第三察度王統 察度——武寧

第四尚王統(第一尚氏) 尚思紹——尚巴志——尚忠——尚思達——尚金福——尚泰久——尚德
 第五尚王統(第二尚氏) 尚円——尚宣威——尚真——尚清——尚元——尚永——尚寧——尚豊
 ——尚賢——尚質(以下省略)

右の五王統の各開祖と最後の王について、『世鑑』の記事を追ってみることにしよう。

第一舜天王統の開祖舜天は、為朝伝説により潤色された王統である。何故、琉球史の第一王統の始祖に、為朝の末裔を持ってきたかについては、かつて筆者も考えてみた。⁽⁵¹⁾すなわち「世鑑」成立当時、琉球王府は、「日琉同祖」という重大かつ深刻な政治的課題を負っていたので、琉球始祖神話を、わざわざ日本史の実在の人物の後裔とすべき必要に迫られていたことを結論とするものであった。これは、格別の政治的理由によるものであった。むろん後世の付加である。第一王統の最後の義本王についてはほぼ以下のような内容を載せている。義本王は、即位の翌年から、大飢饉と疫病に見舞われ人民の半ばを失った。義本王は嘆き悲しみ、このたびの相次ぐ不幸は、自分の不徳によりもたらされたとして、退位を群臣に諮った。群臣はすぐに人民の尊敬と信望を得ていた英祖を推挙した。すると「景星出、卿雲興、疾疫、止ニケリ」という具合で、舜天王統は三代で王朝交替となった。

第二王統の開祖・英祖王は、前述のように傑出した王であった。出世譚も「其母夢上帝⁽⁵²⁾。娠給ケル間、後人、天子トハ申奉ル也。南宋、紹定二年己丑ニ、御誕生有り。其年聖瑞有テ、鳳鳴龍吟ス⁽⁵³⁾」とあって、神秘の色どりを添えている。「上帝を夢みて娠んだ」という上帝は、易の陰陽思想に

よるものであろう。このあと英祖は、「おもろさうし」で「てだこ」(日の神の子)、英祖の生まれた家を「てだがうち」(日の神の家)とする、日子思想の新宗教機軸を生み出していく。⁽⁵⁴⁾英祖の事蹟に、周の国の徴政に範を取り、口分田法を実施し、併せて貢租制を確立したことが挙げられる。また、浦添城址からは、青磁の破片や高麗の瓦も出土しており、この頃から中国・朝鮮との交易も盛んになったことが推察される。「上帝を夢見て娠んだ」ことや「日子思想」は、本論のテーマである陰陽五行思想の受容と展開を考える上でまことに重要な記事であるが後述にまわしたい。この英祖王統の末裔西威王は、十歳で即位した。そこで母后が代って政権を掌握した。政権の座にあつてはならぬ牝鶏(易の思想)が座ったため、とたんに国乱れ、兵乱が起き、賢臣諸侯は遠ざかり、第三王朝開祖察度(易の思想)が座ったため、ここに第二王統も滅亡した。

第三王統の開祖・察度王は、すでに言及したように(284頁～287頁)、羽衣伝説に包まれ、母は天女であった。特に農政において功績があり、中国貿易も隆盛を見たが、後に驕慢の心が生じ、毒蛇に左手を咬まれたことが『世鑑』に見えている。この王統はわずか二代で滅びる。察度の世子・武寧王は、父王の遺命にも背き、内色に荒れすさみ、遊びふけた。人民は苦しみ、諸侯皆遠ざかり、ついに第四王統を樹立した、中山王尚巴志の義兵により亡ぼされるところとなった。

第四王統(第一尚氏)を樹立した尚巴志はまず父・尚思紹を王位につけた。この第四王統、第一尚氏によって、琉球は統一政権の成立を見た。三山統一の偉業を達成し、明国や日本本土との交易も急

速にたかまつていったが、相次ぐ内乱によって財政は逼迫した。第四尚王統最後の尚徳王は、「尚徳立給テヨリ、君ノ徳ヲバ不_レ脩給」。朝暮漁獵ニ心ヲ荒ミ、暴虐無道ノミ事トシテ、民ヲ傷害スル事、桀紂ニモスギタリ⁽⁵⁵⁾と、無徳の暴虐な帝王像が打ち出されている。ついに、第五王統（第二尚氏）尚円によって替えられるところとなったのである。

第五王統（第二尚氏）開祖尚円は、むろん「生ナガラノ、聖徳ニテ、御座ケレバ、万事ノ言行、更ニ常人ノ類ニ非_レズ⁽⁵⁶⁾」という具合に有徳の帝王として讃えられていることは言うまでもない。

以上通観してきたように、琉球王朝・五王統の興亡・隆替は、すべて開祖・有徳——末王・無徳という構造で貫かれている⁽⁵⁷⁾。しかも五王統間における「姓」の継承は皆無である。（第一尚氏・第二尚氏は、形式的に尚姓を継いだ）すなわち琉球王朝の交替の論理こそは、天意に背いた政治により、天寵を失うところとなり、革命の必然性の論理、それは易姓革命の哲学を踏んだ交替の論理で貫徹されていることをこの際強く指摘しておきたい。従来この視点から捉えられた王朝交替の論理の展開を筆者は寡聞にして知らないが、これは『世鑑』の著者である大碩学・向象賢の大きな歴史認識・思想的中核を形成するものであったことを見落としてはいけない。但、古琉球の王朝交替・易姓革命の原理が、五行の五徳終始説で組み立てられているかどうかについては、今後の詳細・緻密な分析手続を経なければ、明確な答は見出せない。以上が、陰陽五行思想を受容したと考えられる第二の理由である。第三点として、『おもろさうし』は、この点につきどうであろうか。

前稿において、オモロの「天地」について少しく言及した。すなわち宣長がすでに言ったように、「天地は阿米都知の漢字⁽⁵⁸⁾」であり、漢語である。万葉でもすべて「アメツチ」と訓読されていたことを例証した。ところが古琉球古歌謡のオモロにあつては、「天地」を「アメツチ……」とせず、ストレートに「テンチ」と音読していることは、耳新しく興味深いと言った。その理由として、漢語が民衆オモロまで根深く定着し、定着度の古さのゆえか、あるいは、その表現が新しいかのいずれかであろうとした。また「天地」の語順を入れかえて「地天⁽⁵⁹⁾」と謡い出すことも、何となく気になることを述べておいた。「地天」は、いったんこだわって見るとまさしく特異である。「地天」は、古代日本人（古琉球人も含む）にとっては、正しく陰陽思想がなければ発想しえない表現である。陰陽思想では、陰の気は、重く下へ下へと下降する性質を持ち、陽気は軽く上へ上へと上昇する性質を持つ。陰陽は、交合してこそ万物を生成する。陰陽を文字を介して紙上に書いた時、陽陰としたのでは↑陽は上昇し、陰は↓下降して相交わらない。そこで語順を入れかえ陰陽とし、陰↓陽↑とすれば下降の陰気と上昇の陽気が相交わることになる。すなわち二気の性質と紙上に書いた場合の視覚の問題とが相俟って陰陽と表現されるようになった。陰陽を天地に比べ、陰⇓地、陽⇓天となるので、「地天」という表現が導き出されてくる。オモロの「地天とよむ大ぬし」などに見られる「地天」は、おそらく陰陽思想からの影響であろう。『世鑑』『世譜』『由来記』に顕著に見られた易や五行思想は、『おもろさうし』とて、おそらく無関係ではあり得なかつたはずである。また、オモロに「地天鳴響む大主 又天

地鳴響む若主 又や、の御衣^{みしよ} 召しよわちへ 又星の形の 御き、帯 (以下略)、「聞え漏りやいや 星の形 もちろちへ (以下略)」と謡われているように、国王や高級神女の帯や衣裳に星の絵を描いた模様が使われている。⁽⁵⁹⁾

伊勢神宮の二十一年に一度の遷宮祭式に用いられる内宮の「屋形文錦^{やかたものにしき}」と、外宮の「刺車文錦^{さくぐるまものにしき}」は、共に秘紋として、門外不出、複製を禁じ使用が許されない図柄だそうだが、吉野氏は、前者が中国天文学で最高の神・北極星「太一」と天照大神が習合した居所の図柄、後者を天帝「太一」の乗る車としての北斗七星を圖案化したものとの考えを提示された。⁽⁶⁰⁾

オモロの国王や高級神女の帯や衣裳に使われている星の文様も、陰陽五行の天象の図柄ではないかとも考えられるものである。⁽⁶¹⁾

さて、これまで、古琉球における陰陽五行思想の受容の足跡を辿ってみた。古琉球においては中国との密月関係を反映し、ことに顕著にその痕跡が見られた。右に示した他にも、君子南面思想や、「世鑑」開巻第一の「二人陰陽和合ハ無ケレドモ、居処、並が故ニ、往来ノ風ヲ縁シテ、女神胎⁽⁶²⁾給」に見られる風により胎む思考、また「金黃色・黄地は、王母・王妃・王女・王の姉姉・王子夫人のいわゆる金簪の階級の人たちの身分を象徴した」とされる「黄」の色彩も実に陰陽五行によるものである。すなわち男・王などを象徴する天(乾)・陽に対し王母・王妃・王女など女は地(坤)・陰を象徴した。そして地は五行の五気では、土氣に当り、土氣は色彩では「黄」を示すからにほかならない

(前稿「五行配当表」を参照されたい。『由来記』巻二、「官職列品」や巻三「事始」の「衣服門」を吟味すると、五行による色彩配当が、かなり明確に充當されているだろうとの狙いが立てられる。

かくして、古琉球もまた、深遠な中国古代宇宙哲学の受容と吸収に一意専心たるありさまであった。両国の冊封関係を思えば、けだしこれはあまりに当然すぎる帰結であった。

五

さて、これまで、日琉における易(陰陽説)や五行説の受容の歴史的考察を辿ってみた。長い道程になってしまったが、ここで再び問題を信仰軸へ戻したい。

水平軸(東西軸)を日本古代固有信仰軸として捉えることは、幾多の先覚がそれぞれの立場から説き、もはやこれは定説であると言つてもいい。そして垂直軸も、北方系民族に顕著な思考で、古代中国の影響下にあると言われ続けてきた。だが、古代中国のいかなる思想に淵源を持つものであるかという基本的な問題が、従来は少しく軽視されていたのではないかと反省される。筆者はこれが、「宇宙を動かす道」、「人の生きる道」、「天下国家を治める道」として、天文学・道德学・政治学が三位一体・相即不離に捉えられ、しかも諸学を包摂する広さ・大きさで説かれている「易」の陰陽説や五行説にあることを、ここで特に強調したい。

大和の覇者も古琉球の王者も、宇宙的規模で構築された東洋哲学の蘊奥を啓く哲理に邂逅するや、たちまちにこれを受容した。天上と地上を結び、特に哲学・政治学・道徳学・宗教学と深甚に係わつて説かれるこの哲理こそ、大和の覇者や古琉球の王者にとり、当面する最大にしてかつ切実な問題であつたからである。これまで何度と言つたが、飛躍的な発展・権力の集中化・強大化が達成された時、権力者の夢見ることは、同一の過程を経る。すなわち自己の出自の神聖化、そこから拡大する神権統治の絶対化・論理化・永遠化・尊厳化……等々である。それらは、いきおい宗教色の濃いものへと流れていく。神聖化・絶対化・尊厳化には、「神」こそが不可欠であつた。あまつさえ、この神も常民と等しい神觀念に立脚すべきではなかつた。そのような統治原理・政治理念の必要性に迫られていた権力者にとって、自らの欲求を完璧に満たしてくれたのが、中国古代宇宙哲学の深遠なる哲理であつたのである。

以上が垂直軸へと移行する道すじである。しかし筆者は、ここで少しく注意を喚起しておきたいことがある。

日琉の権力者は、水平軸を根幹とする神觀念・信仰軸から離れ、上・下の二分観、あるいは、上・中・下・の三分観に基づく垂直軸へと移行させることによって、我と彼とを俊別する統治原理・政治理念を一応達成させた。ここで振り返って確認しておきたいが、水平軸を生み出す信仰の母胎は、不斷に繰り返えされる太陽の輪廻・転生、すなわち太陽の運行に依つていた。

一方中国では、垂直軸は、日（陽）、月（陰）も重要であるが、天文現象の最たるものを、動かぬ星・北極星に置き、これを「天帝」として最高の神格に位置づけた。しかし実際は規則正しく運行する北斗七星を、北極星の帝車として、天文現象の根底は、この北斗の動きを追つていた。

日琉の権力者が、信仰軸を水平軸から垂直軸へ移行させる際、重要なことは、信仰母胎は日本固有信仰である太陽を表面的には依然として、最高の神格に置いていることである。そして祭式的に、太陽と北極星を習合させる方法が考え出されている点であろう。このことについては、古琉球の史料が重要な手がかりを提供してくれる。

すでに述べたように、第二王統の開祖・英祖王は、母親が「上帝を夢見て娠んだ」神秘の子であつた。「上帝」は開闢譚では、「天帝」「天太子」とも呼ばれ、これもすでに触れたように、明らかに「易经」に出自を持つものであつた。しかも不動の星・北極星を神格化させたものであつた。英祖王出生譚についてはこの他にも、「聖瑞有テ、鳳鳴龍吟ス」と陰陽思想の祥瑞現象で粉飾され、潤色されていることは確実である。ところが「おもしろさうし」では、これもすでに言及したように「てだ子」、「てだか家」と明確な日子思想を掲げている。すなわち、北極星としての「天帝」ではなく、あくまで「てだ子」なのである。古代日本も同様で、古代中国哲学の垂直表象が打ち出されても、最高の神格は北極星とはならず、やはり「日の御子」としての観想で貫徹されている。

「あがるへ」の「地天鳴響む大主」が、「オボツ」に移行すると、「天帝」と転換していることが注

目されるのである。以前、筆者は拙論で、「オボツ・カグラ世界観はニライ・カナイ世界観から二次的に垂直化した（従って一元的とする見方）世界観ではない。（しかしある前提条件を伴う。後述⁽⁶⁴⁾）」と書いた。「オボツ」は、天という大宇宙と琉球国という小宇宙を対比させ、「天人之学」としての陰陽思想に基づいているのであろうから、やはり「ニライ」とは別次元の世界観である。すなわち、二元的の世界観であるといえよう。（しかしある前提条件が伴う）としたのは、新次元の信仰対象たる北極星が姿を見せず、信仰対象はニライ同様、やはり太陽となっており、複雑な構造を見せている点は、しっかり押さえるべきであらう。以上が、三および四で見てきたように、垂直軸を生み出す母胎となった思想的・信仰的背景である。

では、残る三の戌亥（西北）——辰巳軸や四の子午軸の問題はどうであらうか。この問題についても、やはり易や五行の思想が根本において、しかも深々と横たわっている。

すでに述べたように、垂直構造における易や五行思想の受容も、日琉共に実に興味深い傾向を見せてくれた。あれほど古代中国思想に傾斜しながらも、日本固有信仰の太陽崇拜を、まるごと中国古代天文思想の北極星および北斗七星に転換するようなことはなかった。土着信仰の生命力のず太さを思わせるのに十分なものがあつたが、特に古琉球におけるこの点についての粗い受容の態度は、慎重に隠されながら習合していく古代日本の影の部分の大きく照らし出してくれるようで興味深いものがあつた。これはとりも直さず、宇宙的規模で、しかも諸学を包摂して展開される中国古代哲学の魅力

が、日琉の権力者にとり、かき消すことが出来ない灯をともしてしまっていることにほかならない。そこで日琉の権力者は、祭式的・呪の実修面で、大きくこれを取り込んでいく。この現象は、古代日本においては極めて慎重に、深く静かに、しかし確実に取り込まれていく。古琉球は、時に矛盾を大きく露呈しながら、積極的にあからさまにこれを展開させていく。これがすなわち戌亥軸・辰巳軸・子午軸の問題となつて、神話伝承の上で、歴史の中で、祭式的実修の場面で、実に堂々と前面に押し出されてくる。いったんこの視座から見つめてみると、次から次へと興味も問題も湧いてくる。先に示した方位図を一瞥した限りでもそれは十分に刺激的である。

さらにこの他界の問題は、筆者がこれまで展開した他界の構造分析のみならず、これを機能分析に置き変えて、当然この方向からのアプローチもなされなければならない。すなわち道教の問題が浮上してくる所以である。他界の様相はさらに混沌を極めるかに思えるが、問題の所在はそれほど真暗闇というわけでもない。かすかな灯が確認されるかに思われる。残された問題も大きく高く深い上に、長きに亘るので、以下は次回で考えたい。

注

(1) 例えば、前稿で述べたように、古琉球の人々は、古代信仰軸としての最長の東西軸、すなわち、東の神界・久高島に対し、西の鎮めとしての久米島を、観念的でなく地理的に把握していたふしが窺えることを例証した。しかし、この東西軸は、純粹地理学的方位の東西よりズレがあつて、同時に観念の所産である

ことも示している。同様のことは、刃土——首里という南北（子午）軸にもあてはまる。この南北軸も純粹な南北軸ではないが、観念的に南北軸としてしっかり把握していたことは、あとで示すが、実証資料の提出の用意がある。東北の辺土は、他界の構造的枠組としては真北の位置（点線A部。古代日本の子午軸の北の位置）が観念的に付与され、したがって、伊平屋・伊是名も戌亥軸（点線B部。古代日本の出雲）の構造的役割を担っているものと思料される。むろん古代中国の易や五行思想の影響である（後述）。伊平屋・伊是名——久高島についても同様（後述）。

(2) 前稿は校正の面で手はずの行き違いが生じ、ご迷惑をおかけした。お詫びすると共に、以下のことを訂正したい。

① 87頁4行目、古琉球神聖地界→他界、② 100頁4行目 紹来された↓招来、③ 100頁8行目、「山は天孫氏族にとつても……」以下を、前の行「常民と同様にして」のあとに続ける。④ 100頁11行目、「佐々夜昆壳」↓佐久夜昆壳 ⑤ 106頁6行目、「諸相と比照」↓を ⑥ 122頁図2を、本稿第1図に変える。

(3) 「古事記祝詞」日本古典文学大系 129頁 岩波書店

(4) 「皇太神宮儀式帳」刊本は「群書類従」神祇部所収 3頁

(5) 「万葉集」日本古典文学大系 177番歌、179番歌、岩波書店

(6) 拙稿「おもろさうし」の政治性「沖繩文化」63号

(7) 本居宣長「国号考」「本居宣長全集」第八巻 450頁 筑摩書房

(8) 西郷信綱「古事記の世界」20頁 岩波新書

(9) 飯島忠夫「天文暦法と陰陽五行説」183頁 第一書房

(10) 「淮南子」淮南鴻烈解巻第三 天文訓1頁「漢文大系」二十「富山房。なお原文を読み下し、(一)内は筆者が注解を付した。以下同。

(11) 「淮南子」淮南鴻烈解巻第一 原道訓18頁 同右。

(12) 「淮南子」淮南鴻烈解巻第十四 詮言訓1頁 同右。

(13) その作用は、①生成順、②相生順、③相剋(勝)順、④三合の理、⑤支合などが主なものである。それらは、「五行大義」五巻に説かれていたが、同書は、中村璋八氏による「五行大義全釈」(明治書院)があり、図・表などを使った詳しい全釈がある。なお、吉野裕子氏の一連の著書にも好解説がある。

(14) 「史記」第二 巻二十七(天官書第五) 123～124頁 有朋堂書店

(15) 飯島前掲書 195頁

(16) 「史記」前掲書 123～124頁

(17) 吉野裕子「大嘗祭」弘文堂

(18) 「日本書紀」日本古典文学大系 76頁 岩波書店

(19) ト部兼方「釈日本紀」巻五 71～72頁。「国史大系」八

(20) その他の漢籍出典として、「三五曆記」も挙げられるのは当然である。

(21) 本居宣長「古事記伝」。本居宣長全集第九巻 138頁 筑摩書房

(22) 飯田武郷「日本書紀通釈」第一巻 41～42頁 教育出版センター

(23) 津田左右吉「神代史の研究」 31～32頁 岩波書店。なお、飯島忠夫も、表現・思想ともに漢籍からの借用であるという考えに立っている。

(24) 鈴木重胤「日本書紀伝」。鈴木重胤全集または「国学大系」二二「鈴木重胤集」

(25) 津田敬武「神代史と宗教思想の発達」 54頁

(26) 松村武雄「日本神話の研究」第二巻 29頁 培風館

(27) 「古事記祝詞」日本古典文学大系 43頁 岩波書店

- (28) 武田祐吉「国土築造の神話に就いて」「古事記の概説」。武田祐吉全集
 (29) 吉野裕子「隠された神々」50頁 講談社現代新書
 (30) 本田清「易」上 中国古典選Ⅰ 5、6頁 朝日新聞社
 (31)(32)「日本書紀」 日本古典文学大系 28頁 岩波書店
 (33) 同右 104頁
 (34) 同右 178頁
 (35) 同右 460頁
 (36) 同右 512頁
 (37)「陰陽寮」については、「国史大系」「延喜式」中篇 435、446頁参照。吉川弘文館
 (38)「周易説卦伝」(「易経」下) 295頁以下参照。高田真治・後藤基巳訳 岩波書店
 (39) 前掲書「易経」上 40頁
 (40) 前掲書「周易繫辭上伝」 243頁
 (41) 前掲書「周易説卦伝」 295、306頁
 (42)「琉球国中山世鑑」「琉球史料叢書」第五卷 32頁 東京美術刊
 (43)「易経」上のイが79頁、ロが82頁、ハが88頁、ニが84頁、ホが87頁が、それぞれの出典である。
 (44) 高田真治・後藤基巳訳「易経」上下 岩波書店。吉川幸次郎監修 本田清訳 中国古典選Ⅰ「易」上
 下 朝日新聞社
 (45) 前掲書「易経」
 (46) 同右 241頁
 (47)「中山世譜」「琉球史料叢書」第四卷 20頁 東京美術

(48)(49)「琉球国由来記」「琉球史料叢書」第二卷、「七七 冬至」「七八 御照堂御拝」各条 37頁 東京美術

術

- (50) 吉野裕子「持統天皇」83頁 人文書院
 (51) 拙稿「中山世鑑」所伝・琉球開闢神話の史料批判的研究」「沖縄文化」42号
 (52) 前掲書「琉球国中山世鑑」 25頁
 (53) 同右 27頁
 (54)「おもしろさうし」では、垂直表象の神観念は、英祖王において顕著になってくる。本論のテーマ「陰陽五行思想」の受容の問題とも重要密接に係わってくる。
 (55) 前掲書「琉球国中山世鑑」 48頁
 (56) 同右 51頁
 (57) 記紀でも、応仁・仁徳(有徳)——武烈(無徳)——という認識があったことは指摘されている。
 (58) 本居宣長「古事記伝」本居宣長全集第九巻251頁
 (59)「おもしろさうし」十巻—513、十二巻—682
 (60) 吉野裕子「大嘗祭」37、40頁 弘文堂
 (61)「おもしろさうし」では「おもしろ音揚り」にも、「御星」と使われており(八—408)、必ずしも王族関係者の使用と限定出来ない点も残る。

- (62) 前掲書「琉球国中山世鑑」 13頁。なお、「風により胎む」思考については、黒岩重人氏のご教示による。
 (63) 岡村吉右衛門「琉装のいろいろ」「守礼の邦沖縄」下 270頁 講談社
 (64) (6)に同 37頁